

# 特集

## これからの時代の 土木学会誌のありかたを考えよう

Let's think about the future of JSCE Magazine, "Civil Engineering" !

特集担当主査：二井昭佳

特集企画担当：大畑空輝、川口暢子、菊原紀子、田中聖三、田邊麻由子、濱名正泰、山本礼子

あなたにとって土木学会誌はどのような存在だろうか。

「ジェネラリストたる土木技術者の教養と哲学を、土木学会全体に、そしてひいてはその背後にある社会全体に発信しつづける雑誌」。2007年5月号特集「学会誌デザイン90年」での歴代編集委員長へのインタビューを通じて整理された、学会誌の役割である。

それから16年。土木を取り巻く状況も大きく変化した。東日本大震災をはじめ頻発する災害からの復興、インフラメンテナンスや環境再生、道路空間の再編やウォークアブルなまちづくりなど、市民参画の実践を目にする機会も増えた。「社会全体に発信しつづける雑誌」としての役割はますます高まっている。

他方、ツイッターやインスタグラムといったSNSが広く普及し、誰もが気軽に情報を受け取り、発信できるようになった。特に若い世代ではソーシャルメディアに費やす時間が他の世代に比べ圧倒的に多いという。つまり同じ情報であっても、伝えたい相手や内容に応じて、メディアを選ぶ時代になった。ちなみに土

### ABSTRACT

Together with members of JSCE, we would like to discuss what JSCE Magazine should be in the future. We organized this issue with four main perspectives to provide triggers and clues. These are interviews with experts who convey the appeal of civil engineering and connect people, a trilogy on the role of JSCE Magazine in the coming era, the results of a questionnaire survey on JSCE Magazine, and the review of all the articles by committee members in charge of this issue. Please join us in talking about the future of JSCE Magazine!

木学会では100を超えるSNSのアカウントが情報発信をしている。

さて、こうした変化の中、学会誌が「土木技術者の教養と哲学」を発信する役割を果たし続けていくためには、学会誌も変わっていくことが必要ではないだろうか。会員の皆さんと一緒に、これからの時代の学会誌のありかたを考えていきたい。本特集は、そのきっかけと手がかりを提供することを目指して、大きく四つの視点で記事を構成している。

一つ目は、「魅力を伝え、人と人をつなぐ達人に学ぶ」である。道路や橋梁、河川や水道を知らない人はほとんどいないが、それらが土木の仕

事だと知る人はまだまだ少ない。土木の魅力や価値を伝え、「造り手」である土木技術者と「使い手」である市民が手を携えることで、豊かな暮らしを築いていきたい。そのヒントを得るために登壇いただいたのは以

下の3組の達人たちである。プラタモリをはじめ、身近でありながら見過しがちな素材を掘り下げ視聴者を虜にするTVプロデューサーの尾関憲一氏と、前・土木学会誌編集委員長の羽藤英二氏。土木の

かつこよさを伝える活動に取り組み、噂の土木応援チームのデミー氏とマツ氏。「造り手」ではなく「使い手」から都市の豊かさを生み出す活動を進めるHot Citiesの石川由佳子氏と杉田真理子氏だ。

へと変わる。人を中心に据えることで、学会誌の可能性が大きく膨らむ予感を持った。皆さんはどのように感じながら読まれるだろうか。三つ目が、「あなたは学会誌をどう思っている?」。読者の皆さんが今の学会誌をどう思っているのか、これら

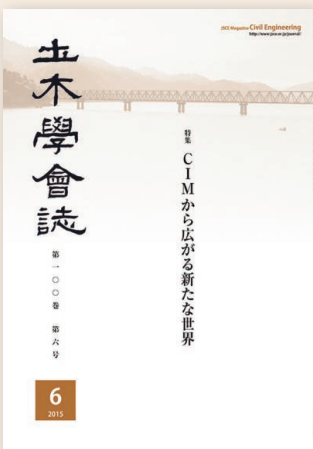
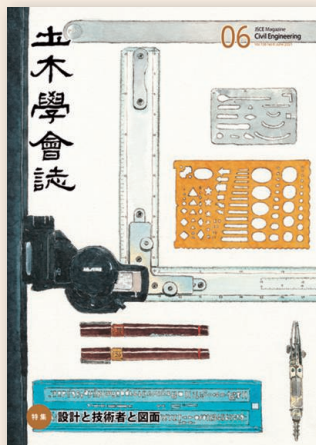
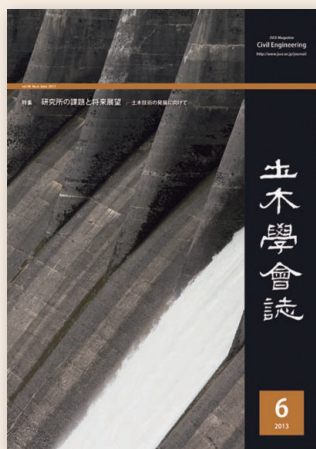
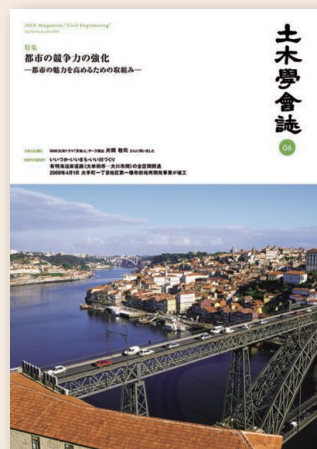


図1 2008年以降の表紙デザイン (抜粋)

いずれも目からうろこの視点やアイデアが満載の記事となっている。取材で印象的だったのは、皆さんの語る姿だ。心から楽しんでる人の話はやっぱり面白い。その大切さをあらためて認識した。ぜひ、楽しんで語り口を想像しながらお読みいただきたい。

二つ目は、岩城一郎土木学会誌編集委員長と、特別編集委員でジャーナリストの後藤千恵氏と日経コンストラクション編集長の眞鍋政彦氏による鼎談だ。三つの編集方針を軸に、これからの時代の学会誌の役割について議論を交わした。重要なキーワードは「人」。人の存在が見えると、技術や研究は、共感できる物語

を把握するために実施したアンケートを紹介する。なんと学会誌の歴代アンケートを大幅に超える3165名もの方に回答いただいた。ぜひ皆さんの本音をご覧いただきたい。

そして最後が、「あなたにとって必要な存在になるために」と題した担当委員による座談会である。あくまでも放談で、実現性が担保されていないわけではないが、編集を通じて考えた私たちの思いを述べた。

途中には、「学会誌はどうやってつくられている?」という編集委員が奮闘する姿を描いたコラムも掲載している。

本特集により、会員の皆さんが、学会誌の役割や存在意義をあらためて考え、仲間とともに、これからの時代の学会誌のありかたを思い描くきっかけとなればうれしい。